



レビー小体型認知症サポートネットワーク福岡 第 10 回研修会・交流会



2018年3月8日（木）BiVi福岡で、協力医 合馬慎二先生の司会のもと、DLBSN福岡の第10回研修会・交流会を開催しました。DLBSN福岡は、2016年1月23日にスタートし、約2年を経て第10回を迎えました。記念すべき第10回は、顧問医の坪井義夫先生のレクチャーと、スタート研修会でもご講演頂いたDLBSN東京の長澤かほる代表をお招きし、特別講演を行いました。29名の参加があり、このうち、ご本人が1名、初参加の方が4名でした。

レクチャー「レビー小体型認知症について」

レビー小体型認知症は、初期に不安やうつが症状といった愁訴が多くみられます。顧問医である坪井先生から、早期診断と薬剤投与の重要性についてお話しされました。今回は、80代女性の症例をもとに具体的な説明が行われました。不安神経症、あるいはうつと思って精神科を受診し、抗うつ薬や抗精神病薬を処方されると、レビー小体型認知症は薬剤過敏のため、パーキンソニズムが急に悪化することがあります。また、悪夢や大きな寝言、頻尿、立ちくらみなど多彩な症状を表すこともあります。早期診断が重要で、適切な治療を施し不適切な治療を避けることが必要であるとお話しされました。

特別講演「レビー小体型認知症サポートネットワーク 未来への展望」

DLBSN東京の代表である長澤かほる様から、「サポートネットワークって何だろう、今後進む道は？未来への展望について」お話しされました。まず、DLBSN設立の背景と交流会の目的についてお話しされました。DLBSNは、2008年に発足した家族会「レビー小体型認知症家族を支える会」の後継組織で、会員を持たず、各エリアでの交流会を中心にご家族、ご本人、専門職者が病気やケアについて学び、支え合い、情報共有を行う組織です。現在、全国に19エリアあり、さらに、京都、大阪と拡大中です。次に、各エリアの活動について紹介されまし

た。神奈川エリアでは、室内だけに留まらず野外活動も行って交流を深めています。東京では、先日、多くの専門職を交えたシンポジウムも開催しました。年に1回全国交流会を開催し、全国エリアの代表が集まって情報共有を行っています。その他にも、2017年京都で開催されたADI（国際アルツハイマー病協会）国際会議や認知症関係当事者・支援者連絡会議に参加し、「認知症の人と家族の会」や「全国若年認知症家族会・支援者連絡協議会」といった他の組織との交流も積極的に行っています。

グループワーク

前回同様、2つのグループに分かれ、それぞれに顧問医の坪井先生、協力医の合馬先生が入られてディスカッションを行いました。その一部をご紹介します。

- グループディスカッションを行うことで、お互いに経験交流がはかれ、苦慮する対応に生かすことができているようだ。
- 認知症カフェに参加することで、ご本人の状態も安定し、介護者も穏やかに介護生活を送れるようになった。
- デイサービスのなかで行われているリハビリを、在宅でも続けることで効果が高まる。
- デイサービスを使っているが介護負担が増えている。
 - ショートステイの利用も考慮してはどうか。
- かかりつけの医師に相談しにくい。
 - 大学病院を紹介してもらう方法もある。大学病院ではチームで診ていくことができる。
 - 症状を良く観察して、その人に合った対応を考えていくことが必要である。

最後に、下村代表から、次回の交流会について説明が行われました。福岡市では、認知症コミュニケーション・ケア技法「ユマニチュード」を推進しています。そこで、ユマニチュードの創設者であるシネスト先生から、直接ご指導を受けたご家族のDVDを使った勉強会を行います。

次回の研修会・交流会は、2018年6月14日（木）18時～です。



報告者：DLBSN 福岡 副代表坂梨左織